

## 「教え方は学べます～ID(インストラクショナル・デザイン)の基本的な考え方～」

開催日時：2018年11月12日（月） 18：30～19：30

情報交換会 19：30～21：00

会 場：大阪学院大学2号館地下1階04教室（大阪府吹田市岸部南二丁目36番1号）

講演者：鈴木克明 教授

国立大学法人熊本大学大学院 社会文化科学研究科

教授システム学専攻長

参加者数：教職員47名（うち会員校からの参加者：41名）

参加大学数 20校（うち会員校数：15校）

※「Salon De 大学コンソーシアム大阪」開催に先立ち、希望者には、18時より大阪学院大学内で日本造園学会賞を受賞したキャンパスの見学ツアーが実施された。

### 1. 講演概要

#### (1) 「インストラクショナル・デザイナー」の文言の入った中央教育審議会答申

- ・大学の事務職員も「常に学んでいるか」という問いとして、参加者に配布された資料の最初のページに挙げられた最近の「高等教育に関するキーワードのうちのいくつを知っているか」と鈴木教授から参加者に話題提議がされた。
- ・平成20年12月24日に文部科学省から出された「学士課程教育の構築に向けて」という中央教育審議会の答申の中に「新たな職員業務」として教員と職員という従来の区分にとらわれない業務として「インストラクショナル・デザイナー」という文言が登場した。
- ・職員も「学び続けている」ような「新しい学びの空気」を学生は敏感に感じることを認識する必要がある。



講演中の鈴木教授

## (2) 大学には「出口と入口のギャップを効果・効率・魅力的に埋める」仕組みが求められている

- ・大学入学時(入口)の「生徒」と卒業時(出口)に「社会が求める人材」となっているべき「学生」のギャップを埋めることが大学の使命である。
- ・入口のレベルは「AP」で示され、卒業時のレベルは「DP」として示されている。
- ・本来は、「CP」で示される「教育理念」、「カリキュラム構成」、「科目単位認定要件」が、ギャップを埋めるための「成長プロセス」であるべき。
- ・「実際は、どうなのか」について参加者がペアを組んで、意見交換をした。

## (3) 「教えないで学ぶ仕組みを作る」インストラクショナル・デザイン

- ・鈴木教授自身が、かつて複数の学部生が履修する教育課程の科目を担当した時に、「教えないで学ぶ仕組み」を実践するために「教材設計マニュアル」という著書を執筆したことを紹介された。
- ・その講義では、事前学習を前提として、毎回ミニテストを実施し、学生がお互いに採点し合い、その後、教員に「わからないことを質問」したり、教員が「助言を与える」というスタイルで授業を進めたことが事例として紹介された。

## (4) 「講義＝レクチャー」という幻影

- ・配布資料の最終ページに掲載のシャンク教授の著書からの引用を紹介され、「文字が読めない市民を対象に(文字が読めた)修道僧が講義(レクチャー)をした時代からいまだに講義が読み聞かせになっている」ことは、簡単に情報や知識にアクセスできる学生にとっては、苦痛でしかない。

## (5) カークパトリックの4段階評価モデルと職場における「研修」

- ・多くの研修は「アンケート」を実施するレベル1の評価段階で終わってしまっている。
- ・カークパトリックの4段階評価モデルに沿って、考察すると「研修は最後の手段」であり、「自分で仕事に学ぶ」ことが重要である。
- ・外部で時間外に行われる「研修」は「リフレッシュ休暇」ではなく、「職務行動を変えるための手段」であるが、「OFF JT」としての研修は学びの10%に過ぎない。
- ・「研修」を受けた後に、研修で得た知識や技術が身についたかというレベル2の検証や、評価3レベルの「行動変容が起きたか」検証するフォローアップ調査や上長アンケートなどを行い、さらには、本来は、評価4レベルの職場が変わったかという「結果」までを検証すべき。
- ・重要なのは、職場において、実際の業務を通じてトライアンドエラーが行われ、フィードバックを受け、必要に応じてエキスパートから助言を得たり、知識や業務の進

め方についてのマニュアルにアクセスできるような「ナレッジ・マネジメント」ができていて、残る90%のOJTが行われていることを認識することである。

#### (6) ミニディスカッション

- ・約60分の短い時間の講演にも関わらず、近くに着席した参加者同士が意見交換を行うミニディスカッションが、何回も取り入れられた講演であった。
- ・実際に、参加者は、「教えられないで学ぶ」体験ができた。

### 2. サロン参加者への「参加証」の授与

- ・講演、質疑応答終了後、大学コンソーシアム大阪会員校からの参加者には、「参加証」が授与された。

### 3. 情報交換会

- ・情報交換会は、大阪学院大学事務長の  
大野様の開会の辞で始まり、鈴木教授を  
囲んで活発な情報交換が行われた。



活発な情報交換を行う参加者

### 4. 第7回「Salon De 大学コンソーシアム大阪」参加者の感想

「教えない」をキーワードにするID（インストラクショナル・デザイン）の発想には驚きました。60分という限られた時間であったので、今回学べたのはIDの「いろは」の「い」の部分にすぎませんでした。それでも講義や研修に対する考え方のパラダイムシフトが起きるには十分な刺激でした。少子化で大学が潰れ、AIの隆盛で大学職員が存在価値を失うこれからの時代において、大学教育の新たなあり方を提案できるIDは、大学が生き残るため、そして職員が教育に対する専門性と矜持をもって働くための、数少ない選択肢の一つではないかと感じました。まさに、不可逆な出会いでした。

(大阪人間科学大学 学生課 白藤康成 様)

以上

(本報告書の「4. 参加者の感想」以外の文章の文責：大学コンソーシアム大阪 SD 研修コーディネーター 塩川雅美)